

「イエシュアの祈り」

マルコの福音書 1:35~37

はじめに

今日のテーマは「祈り」です。神を信じる者ならば、誰もが祈ることを知っています。ある人は祈りに何時間も費やし、一晩中祈る人もいるそうです。イエシュアという御方も祈りを大切にする人、祈りを好む人であったことが今日取り扱う箇所から理解できると思います。そんなイエシュアの祈りにまつわる出来事から、そこに表されているメッセージをともに分かち合っていきたいと思います。

【新改訳 2017】

マルコの福音書

1:35 さて、イエスは朝早く、まだ暗いうちに起きて寂しいところに出かけて行き、そこで祈っておられた。

1. 祈る

ここにはイエシュアが祈られたことが記されています。「祈っておられた」、ここにヘブル語でパーラル(לָלַח)「祈る」という意味の動詞が使われています。この言葉の最初の言及から、その本来の意味を見てみましょう。

【新改訳 2017】

創世記

20:7 今、あの人の妻をあの人に返しなさい。あの人は預言者で、あなたのために祈ってくれるだろう。そして、いのちを得なさい。しかし、返さなければ、あなたも、あなたに属するすべての者も、必ず死ぬことを承知していなさい。」

20:17 そこで、アブラハムは神に祈った。神は、アビメレクとその妻、また女奴隷たちを癒やされたので、彼らは再び子を産むようになった。

これはアブラハムがゲラルという地に寄留した時の出来事です。彼は自分の妻サラがあまりにも美しいのを見て、その地の人々が彼女を奪うために自分を殺すかもしれないと考え、妻であるはずのサラを妹だと偽りました。これを聞いたゲラルの王アビメレクはサラを召し入れ、自分の妻にしようとしています。しかし神が夢の中で彼に真実を告げられ、サラをアブラハムに返すように命じられた時の御言葉がこれです。「(あなたのために) 祈ってくれるだろう。」という箇所に聖書で最初のパーラルがあります。アブラハムの祈り、これによって「いのちを得なさい」と神は言われました。このように、祈りとは本来、死を免れ、いのちを得させるためのもの、人を滅びから救うこと、そして「子を産むようになった」とあるように、種族の繁栄、祝福を与えるものであると考えられます。

しかしこの祈りが人にいのちを得させる、祝福を得させる効力を持つためには、一つの条件が必要であることが示されています。それは「(あの人の) 妻を (あの人に) 返す」ということです。つまり妻を返さなければ、祈りによる救いは生じず、「いのちを得る」こと、祝福されることが「返す」と「祈る」ととの密接な結びつきによって成されることが示されていると考えられます。これはすなわち、神のもとにイスラエルが「立ち返る、悔い改める」ことによって神の救いの御業が成し遂げられることが指し示されていると考えられます。なぜなら神は地の国々の民族の中からアブラハムの子孫であるイスラエルの民を選び出され、この民とのみ永遠の契約を交わされたからです（創世記 17:7）。これはイスラエルの民が神と結婚し、この御方の妻となったとも言い換えることができる状態だからです。しかしゲラルの地でサラがアブラハムから引き離されたように、旧約聖書に記されたイスラエルの歴史において、この民は神に背を向け、偶像礼拝を行い、神から離れてしまいました。しかしアビメレクによって再びサラがアブラハムのもとに返され、祈りによって「いのちを得た」ように、神と永遠の契約を交わした、まさに神の妻であるイスラエルがやがて神に立ち返る時、人は滅びを免れ、救われるという神の御計画が表されていると考えられます。イスラエルが神に立ち返る、悔い改めるとは、ユダヤ人とも呼ばれるこの民が、神の御心、御計画を理解し、信じ、その完成者である神の御子、メシアであるイエシュアを受け入れること、そして究極的には、終わりの日、地上に再臨されるイエシュアによってすべてのイスラエルの民が集められ、神が彼らに約束された地に返されることであると考えられます。それがアビメレク（王）によってサラが返されたことに表されていると考えられ、イエシュアは神の国の王として、父なる神にイスラエルを立ち返らせるという神の御計画が指し示されていると考えられます。

そして「アブラハムは神に祈った」、つまりアビメレクの祝福のために祈ったアブラハムの姿に、イエシュアを祝福するイスラエルの民の姿が表されていると考えられます。なぜなら彼らがイエシュアを神の御子メシア、イスラエルの王として認め、そして祝福するその時が、イエシュアが再びこの地上に来られ、イスラエルの民を集め、神が彼らに約束された地に彼らを帰らせる時だからです。それはこのように語られているからです。

【新改訳 2017】

マタイの福音書 23:39 わたしはおまえたちに言う。今から後、『祝福あれ、主の御名によって来られる方に』とおまえたちが言う時が来るまで、決しておまえたちがわたしを見ることはない。』

このようにパール「祈る」とは本来、アブラハムの子孫であるイスラエルの民がイエシュアを祝福して呼び求め、王なるメシアとしてこの地上に、イスラエルの地に来られることを呼び求めることを指し示すものであり、これが神の御心、神が成し遂げようとしておられる御計画であり、その完成であることを知り、覚え、信じるためのものであると考えられます。ですからイエシュアの祈りとは、私たちのするような、お願い事や感謝の祈りではなく、神の御計画を知り、覚え、そしてそれに聞き従うための時であったと考えられます。

2. 寂しいところ

またイエシュアは祈る場所として「寂しいところ」を選ばれました。ここにはホルバー(הַרְבֵּי)、ヘブル語で「荒廃した地、廃墟」という意味の名詞が使われています。この最初の言及も見てみましょう。

【新改訳 2017】

レビ記

26:31 わたしはあなたがたの町々を廃墟とし、あなたがたの聖所を荒れ果てさせる。わたしはあなたがたの芳ばしい香りをかぐことはしない。

このレビ記 26 章は「あなたがたは自分のために偶像を造ってはならない…それを拝んではならない。(レビ記 26:1)」という偶像礼拝の罪について記された箇所です。そしてこの罪を行うならば、神は「(わたしはあなたがたの町々を) 廃墟とし」という箇所に聖書で最初のホルバーがあります。このようにホルバーとは本来、偶像礼拝の罪を犯したイスラエル民によってその町々、すなわち国家としてのイスラエルが滅ぼされてしまうことを指し示していることがわかります。ではイエシュアはこのホルバー「寂しいところ」で一人祈られ、イスラエルの滅亡を嘆いておられたのでしょうか。そうではありません。実はこのレビ記 26:31 の後にはこのような続きがあります。

【新改訳 2017】

レビ記

26:42 わたしはヤコブとのわたしの契約を思い起こす。またイサクとのわたしの契約を、さらにはアブラハムとのわたしの契約をも思い起こす。わたしはその地を思い起こす。

26:44 …わたしは彼らを退けず、彼らを嫌って絶ち滅ぼさず、彼らとのわたしの契約を破ることはない。わたしが彼らの神、【主】だからである。

26:45 わたしは彼らのために、彼らの父祖たちと結んだ契約を思い起こす。わたしは彼らを国々の目の前で、彼らの神となるためにエジプトの地から導き出したのだ。わたしは【主】である。」

このように、「寂しいところ」ホルバーの最初の言及であるレビ記 26 章は、偶像礼拝の罪によって滅びてしまうイスラエルを指し示しているのではなく、そのイスラエルの先祖であるアブラハム、イサク、ヤコブに与えられた契約を神が「思い起こす」こと、つまり

【新改訳 2017】

創世記

12:1 【主】はアブラムに言われた。「あなたは、あなたの土地、あなたの親族、あなたの父の家を離れて、わたしが示す地へ行きなさい。

12:2 そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとする。あなたは祝福となりなさい。

12:3 わたしは、あなたを祝福する者を祝福し、あなたを呪う者をのろう。地のすべての部族は、あなたによって祝福される。」

というこの契約を決して忘れることなく、一つも違わず必ず成就される、成し遂げられることが指し示されていると考えられます。ですから、この神の契約を覚え、イエシュアがそれを成し遂げる御方であることを指し示すために、イエシュアは敢えてこの「寂しいところ」ホルバーに行かれたのだと考えられます。

3. 朝早く

またイエシュアは「朝早く」に祈られました。ここにはシャーハム(רֶשֶׁת)「朝早く～する」という意味の動詞が使われています。

【新改訳 2017】

創世記

19:1 その二人の御使いは、夕暮れにソドムに着いた。ロトはソドムの門のところに座っていた。ロトは彼らを見ると、立ち上がって彼らを迎え、顔を地に付けて伏し拝んだ。

19:2 そして言った。「ご主人がた。どうか、このしもべの家に立ち寄り、足を洗って、お泊まりください。そして、朝早く旅を続けてください。」

これはその罪の大きさのゆえに滅ぼされた町、ソドムとゴモラに起こった出来事の一場面です。二人の御使いがソドムの門に座っていたアブラハムの甥のロトに出会います。そのロトが御使いたちを自分の家に歓迎しようとして「(このしもべの家に立ち寄り…)そして、朝早く(旅を続けて)」という箇所には聖書で最初のシャーハムがあります。このようにシャーハムには本来、神から遣わされた御使いが、招かれた家に立ち寄り、そして「朝早く」すなわち短い滞在の後、またすぐに出て行くことが示されていると考えられます。これは人として地上を歩まれたイエシュアの公生涯を表す「型」と考えられます。なぜならこの時のイエシュアもまた、一時的に地上に来られたのであり、弟子を召し出し、福音を宣べ伝え、そして十字架、復活という重要な使命はあったものの、それが完了すればまた天の御父のみもとに行くことが定まっていたからです。イエシュアの地上での生涯は33年でしたが、その公の働きはわずか3年半という短いものでした。ですからシャーハム「朝早く」祈られたイエシュアの姿には、この時の御自分の地上での歩み、働きが短いもので、再び天の御父のみもとに行くことが表されていたと考えられます。ソドムの町を訪れた御使いが出会い、そして救い出されたのはロトとその家族だけで、それ以外の者たちは盲目にされました。(創世記 19:11) 同様にイエシュアの3年半の働きの中で、神に立ち返らされた者はわずか、多くの人の心は頑なにされ、イエシュアを信じることはできませんでした。このようにソドムとゴモラの出来事の中に、イエシュアの姿とその歩みが指し示されていると考えられます。

ちなみに、ソドムを訪れた御使いが二人であったのに対し、それと結びつくイエシュアが御一人であるのはおかしいと感じるかもしれません。しかしイエシュアは御一人で歩まれたものではありません。もう一人、イエシュアとともに歩む者の存在が次に示されています。

【新改訳 2017】

マルコの福音書

1:36 すると、シモンとその仲間たちがイエスの後を追って来て、

4. 後を追う

イエシュアの「後を追って来る」者、そしてともに歩む者、弟子たちの存在が示されており、ここでは「シモンとその仲間たち」と記されています。シモンはヘブル語で「聞く」という意味の動詞シャーマ(שמע)の派生語です。つまり神の御声を「聞く」者、御言葉に「聞き従う」者の存在がここに指し示されていると考えられます。彼らはたとえ暗闇の中でもイエシュアがどこに行かれたのか、そしてどこにおられるのかを知っていたことがわかります。そして暗闇の中でもイエシュアを「見つけ」ることができました。これはイエシュアと同じ思い、同じ考え、同じ視点を持っていなければできないことです。すなわちイエシュアがどのような御方で、何を目的としておられ、何を成し遂げようとしておられるのかということに対して目が開かれている者の存在を指し示すと考えられます。たしかにこの時点においては、まだ実際に弟子たちがイエシュアのすべてを知っていたわけではありませんが、彼らのこの行いと結果が、イエシュアとともに歩む、イエシュアの弟子とはどのようなものであるのかということ「型」として指し示していると考えられます。今の時代、今日の私たちを取り巻く環境は、決して見通しの明るいものではなく、いやむしろ見えないこと、わからないことだらけで、何が正しく、何が間違っているのか、何を頼り、何を信じればいいのかわからない、まさに暗闇の中をさまようような時代です。そんな時代にあってもイエシュアの「後を追って」行くことができる者、それが「シモンとその仲間たち」に表されたイエシュアの弟子の姿です。ここで「(後を) 追って来て」と訳されているヘブル語はラーダフ(רדף)という動詞で、創世記 14:14 にその最初の言及があります。

【新改訳 2017】

創世記

14:14 アブラムは、自分の親類の者が捕虜になったことを聞き、彼の家で生まれて訓練された者三百十八人を引き連れて、ダンまで追跡した。

これは略奪に遭った甥の口とその家族、財産を取り戻すために立ち上がったアブラハムの姿が記された出来事ですが、ここで彼が「(ダンまで) 追跡した。」という箇所には聖書で最初のラーダフがあります。この時アブラハムが引き連れていた者たちはみな「彼の家で生まれて訓練された者」であったと記されており、「追跡する」者とは、忠実で訓練された者であると言えます。ですからイエシュアの「後を追って」行く弟子もまたそのような者であることが指し示されていると考えられます。つまりイエシュアの弟子となる者は、鍛えられ、訓練される必要があるということです。未熟な弟子は時にイエシュアを見失い、神の御心や聖書の御言葉の意味が理解できないこともあるでしょう。私もそんな弟子の一人です。しかしイエシュアは、神は、そんな弟子を「彼の家で生まれた」者、すなわち自分の子として教育し、成長させ「訓練された者」として、この暗闇のような時代にあっても惑わされることなく、恐れることなく、イエシュアを見つめ、この御方が成し遂げようとしておられる神の御計画に目を留め続ける強さを与えてくださることがここに示されていると考えられます。

またアブラハムと彼の家の訓練された者たちは「(ダンまで) 追跡した。」とありますが、この「ダン」というのは地名ですが、「さばく」という意味の動詞ディーン(דָּיַן)の派生語であると考えられ、

【新改訳 2017】

創世記

15:14 しかし、彼らが奴隷として仕えるその国を、わたしはさばく。その後、彼らは多くの財産とともに、そこから出て来る。

15:18 その日、【主】はアブラムと契約を結んで言われた。「あなたの子孫に、わたしはこの地を与える。

という御言葉に最初の言及があり、神のディーン「さばく」ことと、「彼ら」アブラハムの子孫であるイスラエルの民が奴隷の苦しみから解放されて、神が約束された地を与えられることを指し示していると考えられ、この契約、すなわち神の御計画を「追跡する」つき従う者たち、神の御計画を知り、その完成に目を留め、待ち望みつつ生きる者が、ラーダフの持つ本来の意味が指し示すものであり、イエシュアの「後を追う」者であると考えられます。

【新改訳 2017】

マルコの福音書

1:37 彼を見つけ、「皆があなたを捜しています」と言った。

5. 捜す

弟子たちはイエシュアに対し「皆があなたを捜しています」と言いました。ここで「捜しています」と訳されているヘブル語はバーカシュ(בָּקַשׁ)という動詞です。

【新改訳 2017】

創世記

31:39 野獣にかみ裂かれたものは、あなたのもとへ持って行かずに、私が負担しました。それなのに、あなたは昼盗まれたものや夜盗まれたものについてまでも、私に責任を負わせました。

これはアブラハムの子イサクの子ヤコブが、伯父のラバンのもとで働いていた時の話ですが、そこでヤコブはラバンの家畜の「責任を負わされて」いました。ここに聖書で最初のバーカシュが使われており、つまりバーカシュには本来、「盗まれたもの」に対する責任、つまり「盗まれたもの」を捜し出して取り戻す責任を負うという意味があると考えられます。イエシュアにはまさにこのような責任があることが指し示されていると考えられ、また御自身でもこのように語っておられます。

【新改訳 2017】

マタイの福音書

15:24 イエスは答えられた。「わたしは、イスラエルの家の失われた羊たち以外のところには、遣わされていません。」

ルカの福音書

19:10 「人の子は、失われた者を捜して救うために来たのです。」

ですから弟子たちがイエシュアに対して言った「皆があなたを捜しています」とは、「イスラエルの家の失われた羊たち」を捜し出して取り戻す、再び集めるといふ、その全責任をイエシュアが負っておられるということが指し示された言葉であると考えられ、イエシュアとはその責任を果たすために来られる、神から遣わされる御方であると言えます。これは最初の祈りについての言及で、アブラハムのもとに返されるサラについての出来事が指し示している内容が言い換えられたものであり、どちらも同じ神の御計画を指し示しています。

6. 私たちの祈り

このように聖書とは、様々な異なる出来事が記されているように見えて、実は同じ内容を指し示していることが多くあります。そしてそれらはすべて神の御計画についてのものであり、つまり神はその御計画について聖書全体を通して何度も何度も、手を変え品を変え繰り返して語っておられるということです。

もちろん聖書に記された御言葉の解釈法はこの限りではありません。聖書は一般的にも知恵の書として捉えられ、人が今を幸せに、成功的に生きていくための秘訣が記された書として読むこともできます。しかし今日の箇所で見えた「シモンとその仲間たち」に示された、イエシュアの「後を追う」者は、イエシュアが成し遂げようとしておられる神の御計画に目を留め、追及、探究する者であり、決して自分の幸福や安全で快適な暮らしのために聖書を利用するような者とはならないと言えます。そしてそのような考え方、生き方こそが、この暗闇にたとえられるような時代にあっても惑わされることなく、揺さぶられることなく、恐れることなく歩むことのできる唯一まことの道である信じます。今あなたには自分の人生の目的やゴールが見えないかもしれません。またたとえ見えていたとしても、果たしてその通りになるという保証はどこにもありません。しかし神の目的とその御計画の完成は、この聖書の中に何度も繰り返し強調されて指し示されており、そしてそれは一つも変わらず、すべてが必ず実現するのです。ですから私たちは自分や人が見ているものではなく、神が見ておられるものに目を留めましょう。誰よりイエシュアがそのような御方です。イエシュアはいつも神の御心、その御計画にだけ目を留めていました。そしてそれがはっきりと見えていました。だから寂しいところや暗闇の中でも恐れることなく祈ることができたのです。私たちはとかく忘れやすい、見失いやすい、それゆえに恐れやすい生き物です。ですからこの神の御計画の御言葉を、何度も何度も、繰り返し繰り返し聞き続ける必要があります。それが、それこそが、イエシュアの後を追う者としての、私たちの取るべき祈りの姿勢ではないかと思わされます。つまり私たちの祈りの本質は語るのではなく、御言葉を聞くことにあると信じます。そして語るとすればそれは聞いた御言葉を語るのです。それが私たちの祈りであると信じます。そのような意味において、祈る者、祈らされる者へと整えられていきたいと願わされます。